

**新刊 著者からのメッセージ**



**アナログ教育の復権！  
あることば訓練の舞台裏  
思い出の朗読会**  
Oral Interpretation Festival  
近江 誠 著 朝日出版社

### **どういう内容の本か？**

本書はアメリカのスピーチ・ドラマ学科で学んできた著者が中心になって、名古屋の南山短期大学英語科で1981年から2010年まで続いた、今は幻の〈文学作品音声表現祭〉（オーラル・インタープリテーション・フェスティバル）の舞台裏の訓練記録である。

### **どういう意図で編まれた本か？**

日本には基本には朗読、朗読劇などの伝統がない。多くはパフォーマンス好きの、やや演劇的なコミュニケーションの一形式ぐらいに、当事者にすら誤解されてきている。

望ましくは Oral Interpretation（あるいは Interpretive Reading）という西洋社会のドラマとスピーチの伝統の「コミュニケーション的精読」が基盤になっての知的、情緒的、審美的な一体

でなければならない。この一体性を経験した者はその限りない可能性にことごとく声を失う。

すべては意味の捉え方である。

従来の言語学や英語教育を支配してきたものは、意味とは言葉の中に〈決定済み〉のもの、内在しているものとする〈言語ラング観〉であった。言葉に初めから内在する意味があるのはいうまでもないが、主になるべきは、語り手がその時その場で言葉に与えている意味と機能であるとする〈言語パロール観〉であり、言葉の教育はその方向にパラダイム転換していかなければ慢性的英語力不振はかわらない。

その文の語り手は、そのことばを発することによって、そのことばにどういう意味と機能を与えているか—

それをテキストの中に読み取り、その心に共感しつつ学習者自らの声をその声を重ねていく—この作業が OI (あるいは IR) であり、そうすることで役者は人を感動させることができるが、言葉の学習者は素材のレトリックが話者の体の意識に取り込まれ日本人の悲願である発信する力、共感力、批判鑑賞法的な力などを身につけていくことができるのである。読みと表現の不即不離性、これに気付くことがすべての始まりでありおわりである。そういったわけで、本書は決して朗読、朗読劇についての本ではない。

さらには、本書で紹介する活動では、基本的には個人学習であることばの訓練であるものが本邦では例のないはずの学校ぐるみのグループ教育活動になっている。

留学も含め、教育の本体まで含めて外注に委ねようとしている当今、まずは膝元で、教師と生徒、教授と学生は何ができるか、そして指導者はそのためにどういう風に自己練磨していくべきか

を考えるきっかけに本書がなっただけであれば幸いである。

## ● **本書を読んでもらいたい方** -24のタイプ

### 朗読、アナウンス、舞台関係

1. 「朗読とはあのようなものだ」という先入観を持っている方
2. 演技はセリフを覚えないとできないが、それに比べれば朗読は覚えなくてもよさそうだから楽だという安易な考えに毒されている方
3. オフ・フォーカス、オン・フォーカスの深い意味を理解していないか、きいたこともないままに活動してきた多くの方
4. 朗読とは表現領域のことという縦割り思考に囚われている方
5. Oral Interpretation/Interpretive Reading/表現よみ・などの7つ視点からテキストをコミュニケーション的視座で読み解く訓練をしたことがなく、ただモデルを真似るか、感情を込めればいいと健気にも信じている95パーセント以上の方
6. あと5パーセントの方（合わせて全員）（笑）

### ことばの教育・学習者訓練関係

7. パフォーマンス自体が目的ではなく、テキストの中に潜むパフォーマンス性をひっぱり出す活動をすることで獲得できる豊かな副産物があることに気が付き始めて昂奮気味の方
8. パラリとページをめくり、「ああこういうことね」とわかったつもりになった自称“コミュニケーション研究者”のような方
9. 小学校で英語・国語を教えている方
10. 中学校で英語、国語を教えている方

11. 高校、高専で英語、国語を教えている方
12. 大学で英語、国語、文学、コミュニケーションという蛸壺に入っているだけで深まっていると信じている幸せな方
13. 自分は受験英語だから関係ないと思っている方
14. 英語学習とは英会話だと洗脳されてきている方
15. 英語学習は英検、TOEIC, TOEFL だと刷り込まれている方
16. パラリとページをめくり、これは英語がある程度できるようになった人のための劇っぽい特殊なコミュニケーション活動の本だと見当はずれの誤解をしている残念な方
17. 実は英語ができないからできるようになるためにこの活動をするのだということが分からない方、
18. 一方、出来るつもりでいてもせいぜい英検 1 級、TOEFL 90 0 なんぼで、出上がったと思っ込んでいるのが大半で、さらに上に行くためにも同じ路線を進めばいいのだと考えられる方／考えられない方
19. ことば教育、ならびにコミュニケーション教育全般に関心のある方
20. ことばは単なる道具であるばかりか、それを通して人の心を読み解き、共感し、その訓練は自分自身の創造的発信にもつながっていると思える方
21. そんなことはまったく理解できないし、理解する気もない方

## 教育の将来・あらまほしき日本人

22. 時代の流れに翻弄する高等養育の現状を憂いている方
23. 心とか情を養成することと知を発達させることは二者択一であるという、日本の為に不幸極まりない誤解をしている方
24. 「日本の為に」という言葉に違和感を覚え、あくまでも「自分の為（だけ）」としか考えられないことが劣化以外のなにものでもないということがわからなくなった方

著者 近江 誠



1941年 静岡生まれ

1967年 フルブライト留学生。ボール州立大学、インディアナ大学院でスピーチとドラマ学を専攻、71年に帰国

1971年より南山大学、同短大、名古屋大学、京都外国語大学（大学院）講師、1998年 コロンビア大学客員研究員。

著書 『オーラル・インタープリテーション入門』（大修館書店）

『頭と心と体を使う英語の学び方』（研究社出版）

『英語コミュニケーションの理論と実際——スピーチ学からの提言』（研究社出版・1997年度大学英語教育学会実践賞）

『間違いだらけの英語学習』（小学館）

『感動する英語!』（文藝春秋）

『挑戦する英語!』（同上）

『歴史に残る大統領の就任演説』（小学館）等

現在：南山短期大学名誉教授、日本コミュニケーション学会元会長、近江アカデミー主宰（名古屋、葉山で近江メソッドによるワークショップ）、

